

アジアの伝統芸能 第12回

日本の伝統芸能とアジア

2020年12月17日 (木)

日本の伝統芸能とアジア(上)

日本の伝統芸能は、アジアとどのような関わりを持ちながら誕生してきたのか。

今回は第一回の授業でも触れた狂言を例に、中世以前の日本がアジアとの文化交流を通じて、独自の伝統芸能を生み出すまでの歴史を振り返ってみたい。

世界文化遺産にも登録された、日本が世界に誇る伝統文化・狂言。その知られざる歴史に迫る。

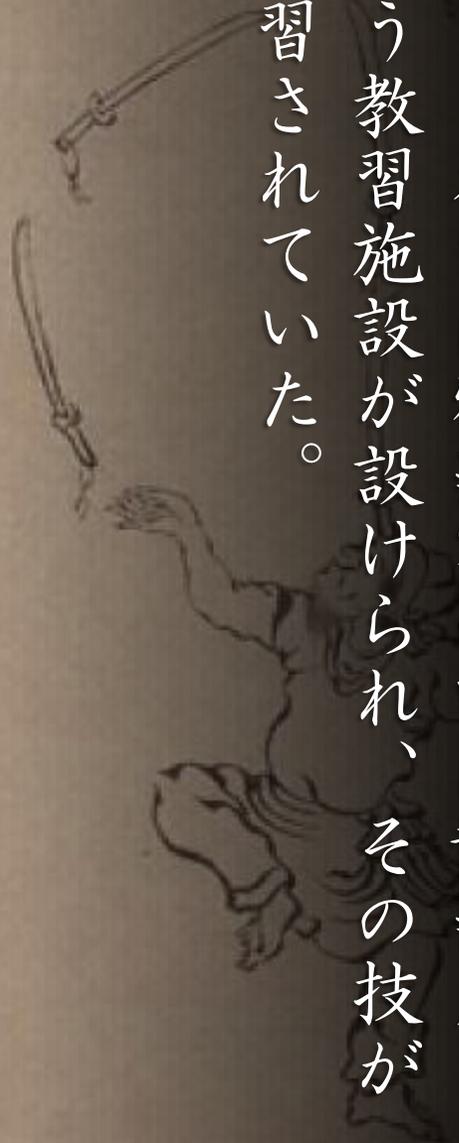


狂言「附子」 (『狂言絵』国文学研究資料館蔵)

狂言はどのようなように誕生したのか???

奈良時代、日本は中国から多くの制度や文化を取り入れたが、その一つに「散楽」がある。

「散楽」とは、歌舞や軽業、奇術などを集めたサーカスのようなもので、日本では雅楽寮の中に散楽戸という教習施設が設けられ、その技が伝習されていた。



三童重立



抑肩倒立



狂言はどこから来たのか？

ところが延暦元年（七八二）、散楽戸は廃止されてしまう。仕事を失った芸人たちは各地を放浪する旅芸人となったり、寺社の保護を受けて祭礼の場で芸を演じるようになった。

そうした中、芸人たちは次第に滑稽な演技で人々を楽しませるようになり、「散楽」という名も転訛して「猿楽」と呼ばれるようになった。

三童重立



柳肩倒立



散樂と猿樂・申樂

平安時代中期の十一世紀半ば、藤原明衡が著した『新猿樂記』には、猿樂の一团が大陸伝来の奇術や軽業に加えて、滑稽な寸劇を演じるようすが描かれ、「猿樂のしぐさとばかりが描かれ、腸がよじれ、顎が外れるほど大笑いしない者はいなかった」と記されている。

多景侯考あり
有備侯考あり

新猿樂記

予廿余季以還歴觀東西二京今夜虫損見物
許之見事者於古今未有就中呪師虫損侏儒
舞田樂傀儡子唐術品玉輪鼓八玉榻相撲獨
双六每骨有骨延勤大領之腰支蛇蟻舎人之
足仕氷上專當之取袴山背城大御之指扇琵琶
琴法師之物詰千秋万歳酒壽飽腹鼓之胸骨
蟻娘舞之頸筋福廣聖之袈裟求妙高尼之纏
絲乞形向當之而現早職事之皮笛目舞之羽
體巫遊之氣裝總京童之虛左礼東人初京上



散樂と猿樂・申樂

「猿樂」はやがて謡と舞と雑子によって物語を演じる能へと発展していくが、その一方で人間の愚かさをコミカルに描く「猿樂」の伝統は狂言へと継承されていった。



では、中国では「散楽」はその後
どうなったのか？



狂言「附子」 (『狂言絵』国文学研究資料館蔵)

中国の「散楽」

日本で「散楽」が「猿楽」への変化した平安時代の末から室町時代にかけて、中国でも「散楽」の中心は、雑劇、院本などと呼ばれる滑稽な寸劇へと変化していた。



宋雑劇「眼藥酸」絹画（北京故宮博物院蔵）

中国の「散楽」

日本の狂言に「なりすまし」をモチーフとした一連の曲がある。金儲けをたくらむ男が、仁王像や仏像になりすまし、人から財物を騙し取るうとするのだが、最後は正体がばれ、追い込まれるという話である。

一方、中国明代の小説『金瓶梅詞話』第三十一回にも、これとよく似た筋立てをもつ「院本」という寸劇の上演風景が描かれている。



狂言「仁王」(月岡耕漁画『能楽図絵』1898年)

中国の笑劇「院本」

傳末（末ニシテ使用人）

節級（外ニアド主）

秀才（浄ニアド書生風のたらし）

主が謡とともに登場。名乗りの後、使用人を呼び出す。

主は屏風に書かれた詩が気に入ったので、作者の王勃を探すよう使用人に言いつける。しかし王勃は千年も前の唐代の人。困った使用人は街へ行き、偶然出会った書生風のたらしに「あなたは王勃さまではありませんか」と声をかける。

（『金瓶梅詞話』第三十一回、一六一七年刊）

新刻金瓶梅詞話卷之一

第一回

景陽岡武松打虎

潘金蓮嫁夫賣風月

詞曰。丈夫隻手把吳鉤。欲斬萬人頭。如何鉄石打成心性。却爲花柔。請看項籍并劉季。一似使人愁。只因撞着虞姬。虞氏。豪傑都休。

此一隻詞兒。單說着情色二字。乃一體一用。故色約于目。情感于心。情色相生。心目相視。亘古及今。仁人君子。弗合忘之。晋人云。情之所鍾。正在我輩。如磁石吸鐵。而得潛通。無情之物。尚爾何况爲人。終日在情色中。做活計。一箇浪蕩。而丈夫隻手把吳鉤。吳鉤。乃古劍也。古有于將莫斨。太阿。吳鉤。魚腸。獨躄之名。言史

中国の笑劇「院本」

するとたらしは「そうだ」と答える。使用人が「王勃さまは身の丈三尺のはず。あなた様では背丈が合いません」というと、たらしは瞬く間に身の丈三尺の王勃に変身する。

中国の伝統演劇の技法の一つに「矮子功」があるが、ここでもこうした技法を使われたものと思われる。

(『金瓶梅詞話』第三十一回、一六一七年刊)



中国伝統演劇の技法の一“矮子功”

京劇
武松

蓋派經典劇目習演

京劇「武松」第二幕「紫石街遇兄」(朱何吉飾武大郎)【三】



大蔵流狂言「菌」 (茂山千五郎家)

中国の笑劇「院本」

とはいえ、いつまでもその姿勢でいるのは苦しいので、たらしは使用人に小さな腰かけを用意しておくよう頼む。ところが使用人がその用意を忘れてしまったために、我慢できなくなったたらしは正体を現してしまふ。

(『金瓶梅詞話』第三十一回、一六一七 year 刊)



中国伝統演劇の技法の一“矮子功”

中国の「散楽」と日本の「猿楽」

では、中国ではこうした演劇は一般にどのような呼ばれていたのか。

中国山西省にある広勝寺には、元の泰定元年（一三二四）にここで奉納の芝居を演じた一座の壁画がある。この壁画には、当時演劇がどのように呼ばれていたのかを知る手がかりが残されている。



山西省洪洞県広勝寺明応王殿元雜劇壁画



CCTV 高清

故宮至宝
10

山西省広勝寺元代雜劇壁画 (NHKスペシャル「故宮」第10集より)

中国の「散楽」と日本の「猿楽」

ここで注目したいのは、この壁画の上に書かれた画題である。

大行散楽忠都秀在此作場

泰定元年四月

（大行の散楽忠都秀ここに上演す

泰定元年四月）

演劇の名称には「散楽」が使われている。



中国の「散楽」と日本の「猿楽」

この壁画が描かれた元の時代といえ、
「渡来僧の世紀」とも呼ばれるように、
禅僧を中心とする日中間の民間交流がもつとも盛んであった時代であり、
また大蔵流狂言の流祖とされる玄恵法印（一二六九〜一三五〇）が活躍した時代でもあった。



山西省洪洞県広勝寺明忘王殿元雜劇壁画

散樂と猿樂・申樂

このように狂言と中国の演劇との間には、その内容や名称など多くの共通点が見られる。このため両者の間には何らかの繋がりがあるのでないかと、これまでも多くの研究が重ねられてきたが、はつきりとした証拠を見つけることはできなかつた。





敦煌写本『啓顔録』の発見

ところがシルクロードの仏教石窟
(莫高窟第十七窟)で発見された古
文書の中から、その繋がりを窺わせ
る資料が見つかった。

それが、狂言「附子」のルーツと
もなったと考えられる敦煌写本『啓
顔録』である。

The background image is a dark, sepia-toned photograph of a cave interior. On the left, a large seated Buddha figure is carved into the rock. To its right, a group of standing figures, possibly Bodhisattvas, are also carved. The right wall is covered in vertical columns of text, likely inscriptions or sutras. In the foreground, there are several wooden tables and a large pile of scrolls or books, suggesting a library or a place of study. The overall atmosphere is historical and scholarly.

狂言「附子」と敦煌写本『啓顔録』

現行の狂言「附子」

現行の狂言「附子」は、主と太郎冠者、次郎冠者による小名狂言として演じられています。



大蔵流狂言「附子」 (茂山千五郎家)

現存最古の狂言台本『天正狂言本』

一方、法政大学能楽研究所には、中世末期の一〇三曲の上演方法が記録された狂言の台本が所蔵されている。巻末に天正六年（一五七八）の日付があるところから『天正狂言本』と呼ばれる、現存する最古の狂言台本である。

一 ちり守一人あて二人ふひおれ

あはれさたり

あふふ新とてゆきにわく

わたりおりにあはれおのりあて

あて志あるまともらんしとて

ここのり二人のあはれとて

あはれさたりとこまらうとて

あはれ天目おれあはれあひてお

はあし守あてこはれあて

わたりおれせよふ一はらうとて

あはれとてあす二はらうとて

天正狂言本「附子砂糖」 (野上記念法政大学能楽研究所蔵)

中世の狂言「附子」

この天正狂言本に収められた「附子」では、登場人物は坊主と二人の人物（小僧？）、すなわち出家狂言になっている。

これはなぜなのか？

一 坊主一人あて二人ふひぢぢ
 ありし頃とて侍者にわく
 ねこれ有りにあはう何の何ゆて
 名て志あるまとももんし
 こそゆり二人の志あまし
 ありさたしとこまらうとて
 志えん天目打ふれまひてお
 侍るし守あてこれ紙んて
 ね何ゆりせせふ一口らし
 志あましとす二口久しと志

『法師物語絵巻』

実は、中世の頃、このモチーフは僧の貪欲や妄語を風刺する笑話として広く知られていた。

近年公開された『法師物語絵巻』には、僧と小僧の対話を通じて、この笑話が生き生きと描かれている。



悪れは香の粉にば死ぬる程に
死食薬を入れ具恥て食うぞ



それは何をなり候うぞ
これの小法師にも賜ひ候へ

僧侶にまつわる笑話を集めた『法師物語絵巻』 (個人蔵 14~15世紀)

この鉢を過ちに打ち割りて候が、
いかなるべき身や(ら)んと思ひて、
生きて何にししべきとて、坊主の
死ぬる御薬の御下ろしを多く取り
食いて候へども死なれず候……

やれ、われは何事にさように
泣くぞ 何事かありつるぞ

『沙石集』

このモチーフが日本で初めて登場
するのは、鎌倉時代の無住が著した
『沙石集』という本の中です。

登場人物は、僧と稚児(寺院に仕え
る有髪の少年)ですが、これまではこ
れが狂言「附子」の原話だと考えら
れてきました。

ナシ。是ヲアラツヒテ孝養モセズ。子息弟子ノ中ノアヒキモ財寶
ノ故ナリ。或山寺ニ有徳ノ房主。弟子門徒多ク有ケリ。頓死シ
處分モセガリケルマ、ニ弟子共處分論ノ中アヒクシテ問答シ
葬モセズ。兩三日ニ及ブ。ホドニ。クサク成ケルヲ見カ子ヲヨソヨリ
葬シテケリ。彼葬シタル者カタリキ。ムケニ近キ事也。サレバ心アラ
ム人ハ眞實ノ福田ノ藏ニ積畜テ七分全得ノ慧業ヲ修スヘ

キナリ。世ノ人ノカシコキト思ハ、カナシタ。善事ニツキヤス事ヲ
ハオニガマシキ事ト慳貪ノモノハ思アヒタリ。實ニ後ノ世ノ力
キタクハヘラシラサルコソ。オカマシク覺エシ能ク思ハカラフヘシ。
或山寺ニ慳貪ナル房主アリテ。粘桶ヲ一モチテ。只一人アル
小兒ニイサ、カモクハセズ。是ハ人ノクヘバ死ヌ物ゾトテ。一
人クヒテハ。ヨクヲキクシケルヲ。此兒イカバ。是ヲクハマシト思テ。
房主他行ノヒマニ。タナニ高クヲキタルトルホドニ。髮ニモ小袖
ニモウチコホソツタタリケリ。日比ホレト思ケルマ、ニ能クニ
三盃クヒテ。房主ノ秘藏ノ水瓶ヲ。雨タリノ石ニ落ソウチワリテ
房主ノ歸タル時。シククト泣何事ツケレカラスノチキヤウヤトイ
ヘハ。アサマシキ事ノ候。御水瓶ヲアヤマチニウチワリテ候時。イカ
ナル御勘當モヤト思ヒ候テ。命イキテモヨシナク覺ヘテ。人ノクヘ

新たな資料の発見

ところがシルクロードの仏教石窟
(莫高窟第十七窟)から、これとよ
く似た話を載せた古文書が発見され
た。

敦煌莫高窟第17窟(画面右端)と発見された古文書群

敦煌写本『啓顔録』(S六一〇)

古文書の名は『啓顔録』。卷末の奥書からは、唐の開元十一年、西暦七二三年に書き写されたものであることがわかっていいる。『沙石集』よりも五百年以上も前のことである。では、その内容はどのようなもの

なのか。密於房中私食之訖殘餽當鉢盂中密瓶送床脚下語弟子云好看我餽勿使欠少床底瓶中是極毒藥喫即死人此僧即出弟子待僧去後即取瓶寫蜜搵餽食之唯時兩箇僧來即索所留餽蜜見餽唯有一顆蜜又喫盡大嗔云何意喫我餽蜜弟子云和尚去後聞此餽香實忍不得遂即取喫畏和尚來嗔即服瓶中毒藥望得即死不謂至今平安僧大嗔日作勿生即喫盡我汝許餽弟子即以手於鉢盂中取兩箇殘餽向口連食報云只作如此喫盡此僧下床大叫弟子回即走去 有一僧年老疾恒共僧於仙堂中轉經即患氣短口干每須一盃熱酒若從堂溫酒恐堂中垢遲即於堂前懸一銅鈴私共弟子作号語好意聽吾鈴聲即依鈴語弟子不解鈴語乃問之僧曰云湯湯朗朗錯錯汝即可依鈴語湯朗朗錯錯子温酒我弟子聞鈴每即温酒數日已後弟子貪為戲劇遂温酒僧動鈴已後來見酒冷曰何意今日不聽鈴聲為与舊聲有別僧曰鈴聲但冷、打、所以有別遂不温酒僧而赦之

敦煌写本『啓顔録』(S610、723年写本)

有別答云今日鈴聲云

開元十一年十月五日

有一僧忽憶鮠喫即於寺外作得數十箇鮠不買得一瓶
密於房中私食之訖殘鮠留鉢盂中密瓶送床脚下語弟
子去好看我鮠勿使欠少床底瓶中是極毒藥喫即斃
人此僧即出弟子待僧去後即取瓶寫蜜搗鮠食之唯殘
兩箇僧來即索所留鮠蜜見鮠唯有兩顆蜜又喫盡即
大嗔云何意喫我鮠蜜弟子云和尚去後聞此鮠香實忍饑
不得遂即取喫畏和尚來嗔即服瓶中毒藥望得即死
不謂至今平安僧大嗔日作勿生即喫盡我汝許鮠弟子
即以手拈鉢盂中取兩箇殘鮠向口連食報云只作如此喫即
盡此僧下床大叫弟子回即走去 有一僧年老痲疾恒共諸
僧於仏堂中轉經即患氣短口干每須一盃熱酒若從堂向房
溫酒恐堂中垢遲即於堂前懸一銅鈴私共弟子作号語云汝
好意聽吾鈴聲即依鈴語弟子不解鈴語乃問之僧日鈴
云湯湯朗朗鐺鐺汝即可依鈴語湯湯朗鐺子溫酒侍
むかし一人の僧、ふと蒸しパンが
食べたくなり、寺の外で数十個の蒸
しパンと一瓶の蜜を買い、僧房の中
でこっそり食べていた。食べ終わる
と残った蒸しパンを鉢に入れ、蜜の
瓶を寢床の下に置いて弟子に言った。
「わしの蒸しパンがなくならないよ
う、しっかりと見張っておれ。寢床の
下の瓶の中は猛毒じゃ、飲めばすぐ
に死んでしまうぞ」

有一僧忽憶餽喫即於寺外作得數十箇餽不買得一瓶
密於房中私食之訖殘餽留鉢盂中密瓶送床脚下語弟
子去好看我餽勿使欠少床底瓶中是極毒藥喫即斃
人此僧即出弟子待僧去後即取瓶寫蜜搵餽食之唯殘
兩箇僧來即索所留餽蜜見餽唯有兩顆蜜又喫盡即
大嗔云何意喫我餽蜜弟子云和尚去後聞此餽香實忍饑
不得遂即取喫畏和尚來嗔即服瓶中毒藥望得即死
不謂至今平安僧大嗔日作勿生即喫盡我汝許餽弟子
即以手作鉢盂中取兩箇殘餽向口連食報云只作如此喫即
盡此僧下床大叫弟子回即走去 有一僧年老痲疾恒共諸
僧於仏堂中轉經即患氣短口干每須一盃熱酒若從堂向房
溫酒恐堂中垢遲即於堂前懸一銅鈴私共弟子作号語云汝
好意聽吾鈴聲即依鈴語弟子不解鈴語乃問之僧日鈴
云湯湯朗朗鐺鐺汝即可依鈴語湯湯朗鐺子溫酒待

僧が去ると、弟子は瓶から蜜を出し、蒸しパンにつけて食べると、二個だけ残しておいた。僧が来て、取っておいた蒸しパンと蜜を出すようにいったが、蒸しパンは二個しか残っておらず、蜜もすっかり嘗め尽くされていた。

(僧は)怒って言った。

「どうしてわしの蒸しパンと蜜を食べたのじゃ」

有一僧忽憶鮓喫即於寺外作得數十箇鮓不買得一瓶
密於房中私食之訖殘鮓留鉢盂中密瓶送床脚下語弟
子去好看我鮓勿使欠少床底瓶中是極毒藥喫即斃
人此僧即出弟子待僧去後即取瓶寫蜜搗鮓食之唯殘
兩箇僧來即索所留鮓蜜見鮓唯有兩顆蜜又喫盡即
大嗔云何意喫我鮓蜜弟子云和尚去後聞此鮓香實忍饑
不得遂即取喫畏和尚來嗔即服瓶中毒藥望得即死
不謂至今平安僧大嗔日作勿生即喫盡我汝許鮓弟子
即以手於鉢盂中取兩箇殘鮓向口連食報云只作如此喫即
盡此僧下床大叫弟子回即走去 有一僧年老痲疾恒共諸
僧於仏堂中轉經即患氣短口干每須一盃熱酒若從堂向房
溫酒恐堂中垢遲即於堂前懸一銅鈴私共弟子作号語云汝
好意聽吾鈴聲即依鈴語弟子不解鈴語乃問之僧日鈴
云湯湯朗朗鐺鐺汝即可依鈴語湯朗鐺子溫酒待

弟子は言った。

「和尚様が去った後、蒸しパンの良
い香りがしたので、がまんできずに
取って食べてしまいました。しかし
和尚様に怒られるのが怖くて、瓶の
中の毒薬を飲んで死のうと思つたの
ですが、不思議なことにはいまだに何
ともありません。」

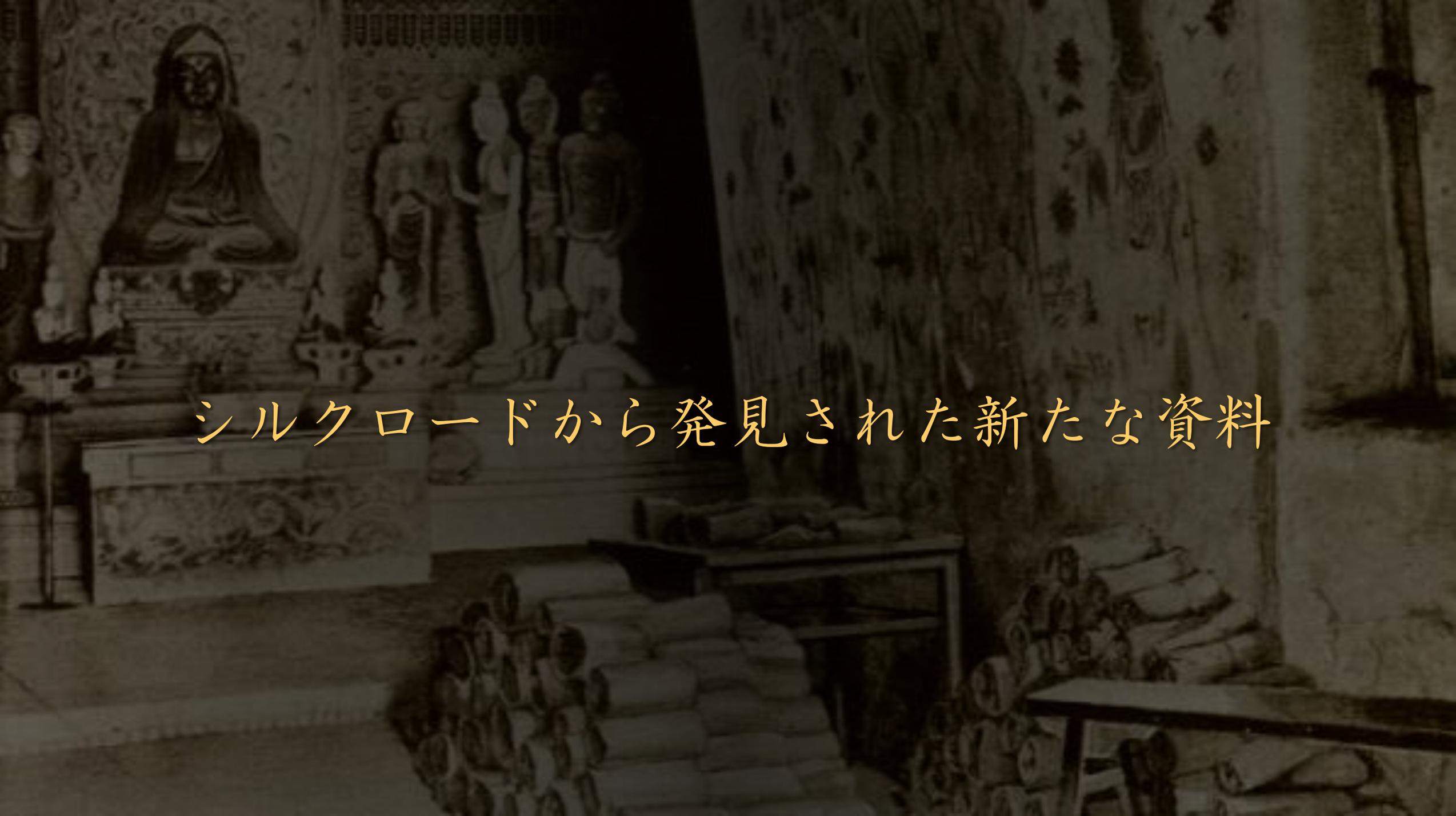
室有一僧忽憶鮓喫即於寺外作得數十箇鮓不買得一瓶
密於房中私食之訖殘鮓留鉢盂中密瓶送床脚下語弟
子去好看我鮓勿使欠少床底瓶中是極毒藥喫即斃
人此僧即出弟子待僧去後即取瓶寫蜜搗鮓食之唯殘
兩箇僧來即索所留鮓蜜見鮓唯有兩顆蜜又喫盡即
大嗔云何意喫我鮓蜜弟子云和尚去後聞此鮓香實忍饑
不得遂即取喫畏和尚來嗔即服瓶中毒藥望得即死
不謂至今平安僧大嗔日作勿生即喫盡我汝許鮓弟子
即以手作鉢盂中取兩箇殘鮓向口連食報云只作如此喫即
盡此僧下床大叫弟子回即走去 有一僧年老痲疾恒共諸
僧於仏堂中轉經即患氣短口干每須一盃熱酒若從堂向房
溫酒恐堂中垢遲即於堂前懸一銅鈴私共弟子作号語云汝
好意聽吾鈴聲即依鈴語弟子不解鈴語乃問之僧日鈴
云湯湯朗朗鐺鐺汝即可依鈴語湯朗鐺子溫酒侍

僧は怒って言った。

「どうすれば、あんなにたくさんの
蒸しパンを平らげられるんじや」
すると弟子は鉢の中に残しておい
た二個の蒸しパンを手でつかみ、つ
ぎつぎと頬張って言った。

「こうやったんですよ。」

僧が寢床から降りて大声で怒鳴る
と、弟子は逃げていってしまった。



シルクロードから発見された新たな資料



敦煌莫高窟

敦煌写本『啓顔録』の発見の地

敦煌写本『啓顔録』が発見された
莫高窟とはどのようなところなのか。



敦煌莫高窟 (NHKスペシャル「敦煌」(後編)より)



敦煌莫高窟第16窟と第17窟藏経洞

敦煌文書の発見

洪べんの御影堂であつたこの石窟は、十一世紀の初め、なぜか封印されてしまった。

それから七百年近くが過ぎた一九〇〇年、ここで修業をしていた王円籙という道士が、ふとしたことからここに隠し部屋があることに気づき、その中から四世紀末から十一世紀初めまでに書かれた古文書や絵画など数万点を発見した。

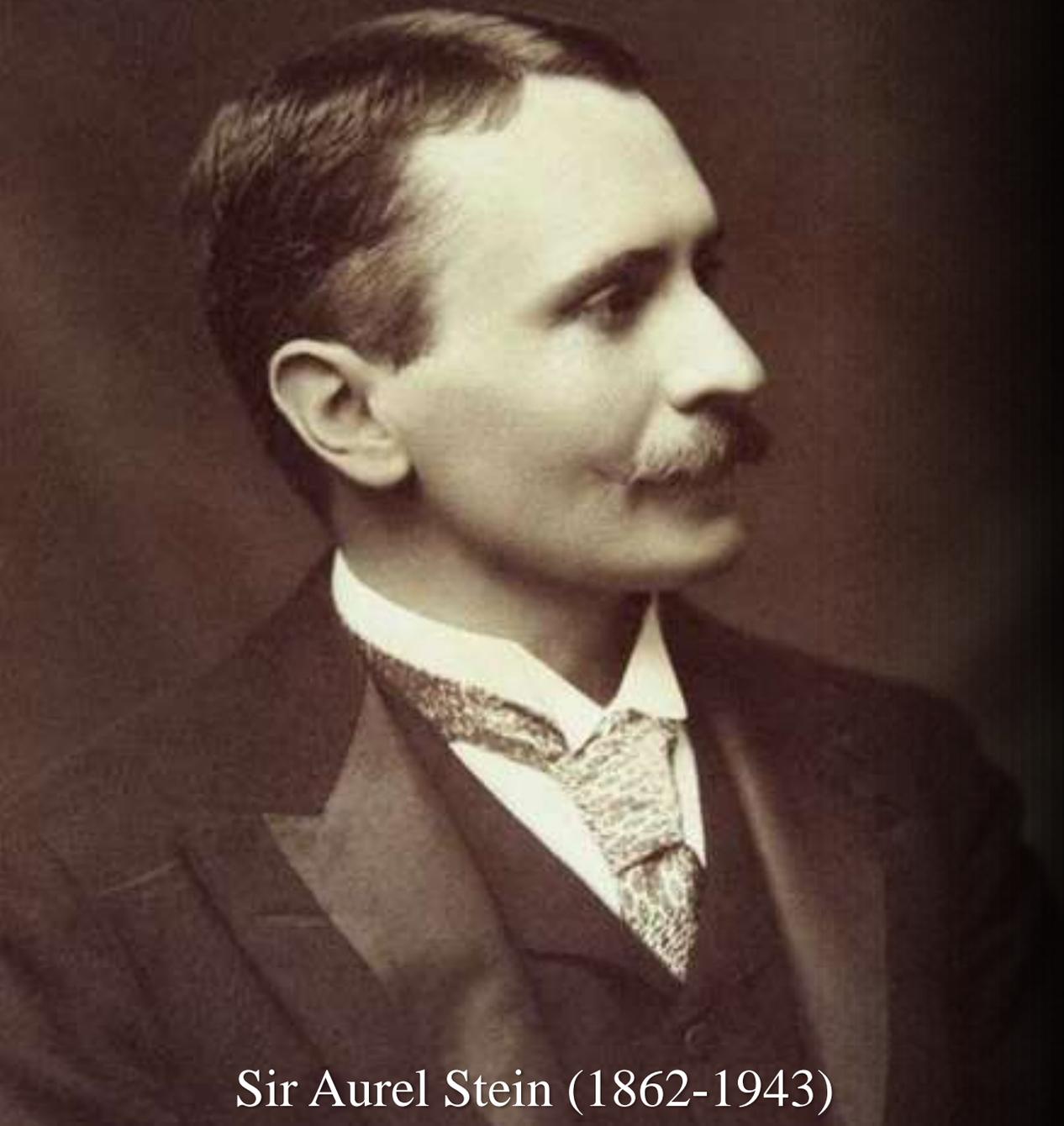


王円籙(1850-1931)

英国に送られた敦煌写本『啓顔録』

その七年後の一九〇七年五月、一人の英国人がこの地を訪れ、大量の古文書や美術品を購入し、英国に送った。ハンガリー生まれの英国人学者・スタイン (Sir Mark Aurel Stein) である。

当時のようすをスタインは報告書の中で次のように記している。



Sir Aurel Stein (1862-1943)

英国に送られた敦煌写本『啓顔録』

「道士の持つ小さなカンテラのかすかな光に照らし出された光景に、私は思わず目を見張った。雑然とではあるが、束ねられた文書の山が床から三メートルの高さまで積み重ねられ、後で測ったところでは、その体積は十四立方メートル近くあった。四畳半ほどしかないこの小部屋では、二人の人間が立つ余地もないほどだった。」

(Sir A. Stein: On Ancient Central-Asian Tracks

二〇三〜四頁)

Sir Aurel Stein (1862-1943)



王元籙(1850-1931)

英国に送られた敦煌写本『啓顔録』

「道士は、西欧の学問のために古代の仏教経典や美術品などの文物を救い出すことは、神意にかなっている。さもないと、これらの文物は地元民の無関心のために早晚散逸してしまうと覚悟したようだった。」

こうして道士とは石窟寺院への寄進という形で補償金についての話し合いを進めることができた。」

(Sir A. Stein: On Ancient Central-Asian Tracks

二〇九頁)

英国に送られた敦煌写本 『啓顔録』

「それからおよそ十六か月後、古文書をぎっしり詰めた二十四箱と、絵画、刺繍、その他同様の美術品を慎重に梱包した五箱が、無事、ロンドンの大英博物館に納められたとき、私もようやく安堵の胸をなで下ろすことができたのである。」

(Sir A. Stein: On Ancient Central-Asian Tracks

二〇九頁)

A sepia-toned portrait of Sir Aurel Stein, a man with a mustache, wearing a dark suit, white shirt, and patterned tie. He is shown from the chest up, in profile, looking towards the right.

Sir Aurel Stein (1862-1943)

The background image is a dark, sepia-toned photograph of a cave interior. On the left, a large seated Buddha figure is visible on a tiered pedestal. To its right, a group of standing figures, possibly Bodhisattvas, are carved into the rock. The right wall is covered in vertical inscriptions or scrolls. In the foreground, there are stacks of scrolls and a wooden table. The overall atmosphere is historical and scholarly.

狂言「鏡男」と敦煌写本『啓顔録』

覓置此人出門徑走更不尋問 鄆縣董子尚村人並癡有老父
遣子將錢向市買奴語其子曰我聞長安人賣奴多不使奴預
知之必藏奴於餘處私相平章論其價直如此者是好奴也其子
至市於鏡行中度行人列鏡於市顧見其影少而且狂謂言市人
欲賣好奴而藏在鏡中曰相麾鏡曰此奴欲得與錢市人知其魔
託之曰奴直十千便付錢買鏡懷之而去至家老父迎門問曰買得奴
何在曰在懷中父曰取看好不其父取鏡照云云見鬚鬚皓白面
目黑黧乃大嗔欲打其子曰豈有用十千錢而貴買如此老奴舉
杖欲打其子子懼而告母乃抱小女走至語其夫曰我請自觀之
大嗔曰癡老公我兒心用十千錢買得子母兩婢仍自嫌貴老公飲
釋之餘於處尚不見奴俱謂奴藏未肯出時東隣有師婆村中
皆為出言甚中老父往問之師婆曰翁婆老人鬼神不得食錢財
未聚集故奴藏未出可以言日多辨食亦請之老父曰大設酒食
師婆至懸鏡於門而作歌舞村人皆共觀之來窺鏡者皆

敦煌写本『啓顔録』と狂言「鏡男」

敦煌写本『啓顔録』と狂言との繋

がりは「附子」だけではなかった。

この資料の発見によって、これまで
わからなかったもう一つの狂言の謎
が明らかになった。

狂言「鏡男」。現行でも大蔵流と
和泉流とでは配役、筋立てともに違
いのある作品だが、天正狂言本では
さらに大きな違いがある。

なぜこのような違いが生じたのだ
ろうか。

現行の狂言 「鏡男」

まずは現行の狂言から見てみよう。
写真は和泉流の狂言「鏡男」。和泉流では、男が鏡売りから鏡を買うところから始まる。大蔵流ではこの場面はなく、鏡売りも登場しない。



和泉流狂言「鏡男」 (狂言共同社)

現行の狂言「鏡男」

男（シテ）
妻（アド）

鏡売（アド・和泉流のみ）

訴訟のため都を訪れていた松の山
家の男、無事訴訟にも勝ち、妻への
土産にと都の鏡売りから鏡を買って
故郷に帰る。



現行の狂言「鏡男」

帰郷した男が妻に土産の鏡を渡すと、鏡を知らない妻は都から女を連れてきたといつて怒り出す。男が鏡を他の人にやろうと取り上げると、妻は女をどこかへ連れていくつもりかとますます怒り、男を追い込む。



現行の狂言と中世の狂言の違い

一方、天正狂言本を見ると、中世には登場人物や筋立て、終曲の演出などがかなり異なっていたことがわかる。

一人かゝるあつと入るうたを
ちやか念せるところまよなは
るうかやと志てんんうらに
さふほいんまを引ささて二人

とてさふさて酒よりすのし
立て舞せともちうかやを
あつとを念え舞ひまあ
しんかゝるあつとに
ひまよを打てとらあつと

松山記

一 女一人あつとをよひか
下人せよたねとあつと
くひまを念ふれあつと

中世の狂言 天正狂言本 「松山鏡」

女一人出ておつとをよひ出し、

①下人をもたぬとゆふて、都へ人を
かひにやる。のほる。人かわふとよ
はわる。②たらし一人出て、鏡をう
る。かうてくたる。都の人はきやく
心とて、まつ門に立ておく。さてか
くといふ。女よろこひて見に行。女
見てはら立る。③おうち行て見て、
おふちをかつてきたとゆふてはら立
る。後三つれて見て、女よ男よおふ
ちよ。④後にふへにてはやす。鏡と
りて帰る。

あつとを合て許しよあん
しんかしくあふせとにり
ひまもせ打てらあつとめ

松山鏡

一 女一人出ておつとをよひか
下人をもたぬとゆふて都へ人
をひまもせ打てらあつとめ

現行の狂言と天正狂言本の相違点

①男が都へ行った目的

〔現行本〕 訴訟のため

〔天正本〕 下人を買うため

②男が鏡を買った理由

〔現行本〕 妻への土産

〔天正本〕 鏡を知らずに騙されて

③登場人物

〔現行本〕 男、妻、鏡売(和泉流)

〔天正本〕 男、妻、父、鏡売

④終曲の演出

〔現行本〕 怒った妻が男を追い込む

〔天正本〕 笛の音でめでたく留める

(シヤギリ留め)

覓置此人出門徑走更不尋問 鄆縣董子尚村之並癡有老父
遣子將錢向市買奴語其子曰我聞長安人賣奴多不使奴預
知之必藏奴於餘處私相平章論其價直如此者是好奴也其子
至市於鏡行中度行人列鏡於市顧見其影少而且壯謂言市人
欲賣好奴而藏在鏡中曰相麾鏡曰此奴欲得幾錢市人知其意
誑之曰奴直十千便付錢買鏡懷之而去至家老父迎門問曰買得奴
何在曰在懷中父曰取看好不其父取鏡照云云見鬚鬚皓白面
目黑黧乃大嗔欲打其子曰豈有用十千錢而貴買如此老奴舉
杖欲打其子子懼而告母乃抱小女走至語其夫曰我請自觀之又
大嗔曰癡老公我兒心用十千錢買得子母兩婢仍自嫌貴老公欣然
釋之餘於處尚不見奴俱謂奴藏未肯出時東隣有師婆村中
皆為出言甚中老父往問之師婆曰翁婆老人鬼神不得食錢財
未聚集故奴藏未出可以言日多辨食亦請之老父曰大設酒食請
師婆至懸鏡於門而作歌舞村人皆共觀之來窺鏡者皆云
此家之目見得奴而懸鏡於門而作歌舞村人皆共觀之來窺鏡者皆云

敦煌写本『啓顔録』の中の「鏡男」

鄆県董子尚村の村人はみな愚かで

あつた。ある③老父が①下人を買う

ため息子を市へ行かせた。老父は息子にこう言った。

「聞くところによれば、長安の人は下人を売るとき、あらかじめ本人には知らせず、よそに隠しておいて、こっそり値段の交渉をすることが多いそうだ。また、そうするのがよい下人だそうだ」

覓置此人出門徑走更不尋問 鄆縣董子尚村之並癡有老父
遣子持錢向市買奴語其子曰我聞長安人賣奴多不使奴預
知之必藏奴於餘處私相平章論其價直如此者是好奴也其子
至市於鏡行中度行人列鏡於市顧見其影少而且狂謂言市人
欲賣好奴而藏在鏡中曰相麾鏡曰此奴欲得幾錢市人知其廢
託之曰奴直十千便付錢買鏡懷之而去至家老父迎門問曰買得奴
何在曰在懷中父曰取看好不其父取鏡照云云見鬚鬚皓白面
目黑黧乃大嗔欲打其子曰豈有用十千錢而貴買如此老奴舉
杖欲打其子子懼而告母乃抱小女走至語其夫曰我請自觀之又
大嗔曰癡老公我兒心用十千錢買得子母兩婢仍自嫌貴老公欣然
釋之餘於處尚不見奴俱謂奴藏未肯出時東隣有師婆村中
皆為出言甚中老父往問之師婆曰翁婆老人鬼神不得食錢財
未幾集故奴藏未出可也此家三子多辯食亦請之老父曰大設酒食請
師婆以此家三子懸鏡於門而作觀者村人皆共觀之來觀鏡者皆云
此家三子

敦煌写本『啓顔録』の中の「鏡男」

息子は市へ行くと、鏡売りの間を
通った。市には鏡が並べられていた
ので、のぞいてみると若くてたくま
しい姿が見えた。市の人がい下人
を売るため鏡の中に隠しているのだ
と思い、鏡を指さしてこう言った。

「この下人はいくらだ」

②市の人は彼が愚かなのを知り、騙
して言った。

「この下人は一万だ」

息子は金を払い鏡を買うと、懐に
入れて帰った。

覓置此人出門徑走更不尋問 鄆縣董子尚村之並癡有老父
遣子將錢向市買奴語其子曰我聞長安人賣奴多不使奴預
知之必藏奴於餘處私相平章論其價直如此者是好奴也其子
至市於鏡行中度行人列鏡於市顧見其影少而且狂謂言市人
欲賣好奴而藏在鏡中曰相麾鏡曰此奴欲得幾錢市人知其廢
託之曰奴直十千便付錢買鏡懷之而去至家老父迎門問曰買得奴
何在曰在懷中父曰取看好不其父取鏡照云云見鬚鬚皓白面
目黑黧乃大嗔欲打其子曰豈有用十千錢而貴買如此老奴舉
杖欲打其子子懼而告母乃抱小女走至語其夫曰我請自觀之又
大嗔曰癡老公我兒心用十千錢買得子母兩婢仍自嫌貴老公欣然
釋之餘於處尚不見奴俱謂奴藏未肯出時東隣有師婆安村中
皆為出言甚中老父往問之師婆曰翁婆老人鬼神不得食錢財
未報集故奴藏未出可以言日多辨食亦請之老父曰大設酒食請
師婆至懸鏡於門而作歌舞村人皆共觀之來窺鏡者皆云
此敦煌写本『啓顔録』の中の「鏡男」

家に着くと、老父が門まで迎えに
出て尋ねていった。

「下人はどこだ」

「懐の中です」

「出して見せてくれ」

③老父が鏡をかざしてみると、眉
も鬚も真っ白で黒い皺だらけの顔が
見えた。老父は怒って息子を打とう
として言った。

「一万銭もの金を使って、こんな老
いぼれを買ってきたのか！」

覓置此人出門徑走更不尋問 鄆縣董子尚村之並癡有老父
遣子持錢向市買奴語其子曰我聞長安人賣奴多不使奴預
知之必藏奴於餘處私相平章論其價直如此者是好奴也其子
至市於鏡行中度行人列鏡於市顧見其影少而且壯謂言市人
欲賣好奴而藏在鏡中曰相麾鏡曰此奴欲得幾錢市人知其廢
託之曰奴直十千便付錢買鏡懷之而去至家老父迎門問曰買得奴
何在曰在懷中父曰取看好不其父取鏡照云云見鬚鬚皓白面
目黑黧乃大嗔欲打其子曰豈有用十千錢而貴買如此老奴舉
杖欲打其子子懼而告母乃抱小女走至語其夫曰我請自觀之又
大嗔曰癡老公我兒心用十千錢買得子母兩婢仍自嫌貴老公欣然
釋之餘於處尚不見奴俱謂奴藏未肯出時東隣有師婆村中
皆為出言甚中老父往問之師婆曰翁婆老人鬼神不得食錢財
未聚集故奴藏未出可以言日多辨食亦請之老父曰大設酒食請
師婆至懸鏡於門而作歌舞村人皆共觀之來窺鏡者皆云
此家之財物也而懸鏡於門作歌舞村人皆共觀之來窺鏡者皆云

敦煌写本『啓顔録』の中の「鏡男」

老父が杖を挙げて打とうとするの
で、驚いた息子は母親に助けをもと
めた。母親は幼い娘を抱いて「私に
も見せておくれ」と言ってやってく
ると、夫を責めていった。

「馬鹿な爺さんだね、この子はたっ
た一万銭で母と娘の二人の下女を
買ってきたんだよ。それでも高いっ
て言うのかい？」

老父は喜んで息子を許した。

覓置此人出門徑走更不尋問 鄆縣董子尚村之並癡有老父
遣子將錢向市買奴語其子曰我聞長安人賣奴多不使奴預
知之必藏奴於餘處私相平章論其價直如此者是好奴也其子
至市於鏡行中度行人列鏡於市顧見其影少而且狂謂言市人
欲賣好奴而藏在鏡中曰相麾鏡曰此奴欲得幾錢市人知其魔
誑之曰奴直十千便付錢買鏡懷之而去至家老父迎門問曰買得奴
何在曰在懷中父曰取看好不其父取鏡照云云見鬚鬚皓白面
目黑黧乃大嗔欲打其子曰豈有用十千錢而貴買如此老奴舉
杖欲打其子子懼而告母乃抱小女走至語其夫曰我請自觀之又
大嗔曰癡老公我兒心用十千錢買得子母兩婢仍自嫌貴老公欣然
釋之餘於處尚不見奴俱謂奴藏未肯出時東隣有師婆村中
皆為出言甚中老父往問之師婆曰翁婆老人鬼神不得食錢財
未聚集故奴藏未出可以吉日多辦食求請之老父曰大設酒食請
師婆至懸鏡於門而作歌舞村人皆共觀之來窺鏡者皆云
此敦煌写本『啓顏錄』の中の「鏡男」也

ところが下人が姿を現さないの
で、隠れて出てこないのでは
ないかと考えた。そのころ東
の隣に巫女がおり、村ではそ
の占いがよく当たると評判
だった。老父が尋ねて行くと、
巫女は言った。
「御老人、鬼神に供え物も
なく、賽銭も集まらないので、
下人は隠れて出て来ないので
す。吉日を選んで多くの供
え物をしてお招きすればいい
でしょう」

覓置此人出門徑走更不尋問 鄆縣董子尚村人並癡有老父
遣子將錢向市買奴語其子曰我聞長安人賣奴多不使奴預
知之必藏奴於餘處私相平章論其價直如此者是好奴也其子
至市於鏡行中度行人列鏡於市顧見其影少而且壯謂言市人
欲賣好奴而藏在鏡中曰相麾鏡曰此奴欲得幾錢市人知其魔
誑之曰奴直十千便付錢買鏡懷之而去至家老父迎門問曰買得奴
何在曰在懷中父曰取看好不其父取鏡照云云見鬚鬚皓白面
目黑黧乃大嗔欲打其子曰豈有用十千錢而貴買如此老奴舉
杖欲打其子子懼而告母乃抱小女走至語其夫曰我請自觀之又
大嗔曰癡老公我兒心用十千錢買得子母兩婢仍自嫌貴老公欣然
釋之餘於處尚不見奴俱謂奴藏未肯出時東隣有師婆村中
皆為出言甚中老父往問之師婆曰翁婆老人鬼神不得食錢財
未聚集故奴藏未出可以言日多辨食亦請之老父曰大設酒食請
師婆至懸鏡於門而作歌舞村人皆共觀之來窺鏡者皆云
此家王相買得好奴也而懸鏡不牢鏡落地分為兩片師婆取照各見

敦煌写本『啓顔録』の中の「鏡男」

そこで、老父は盛大に酒食の用意
をして巫女を招いた。

巫女は来ると、鏡を門に懸け、歌
舞を行った。村人たちはそろって見
物していたが、鏡を覗いてはみなこ
ういった。

「この家は運がいい。こんなによい
下人を買うとは」

覓置此人出門徑走更不尋問 鄆縣董子尚村之並癡有老父
遣子持錢向市買奴語其子曰我聞長安人賣奴多不使奴預
知之必藏奴於餘處私相平章論其價直如此者是好奴也其子
至市於鏡行中度行人列鏡於市顧見其影少而且壯謂言市人
欲賣好奴而藏在鏡中曰相麾鏡曰此奴欲得幾錢市人知其意
誑之曰奴直十千便付錢買鏡懷之而去至家老父迎門問曰買得奴
何在曰在懷中父曰取看好不其父取鏡照云云見鬚鬚皓白面
目黑黧乃大嗔欲打其子曰豈有用十千錢而貴買如此老奴舉
杖欲打其子子懼而告母乃抱小女走至語其夫曰我請自觀之又
大嗔曰癡老公我兒心用十千錢買得子母兩婢仍自嫌貴老公欣然
釋之餘於處尚不見奴俱謂奴藏未肯出時東隣有師婆村中
皆為出言甚中老父往問之師婆曰翁婆老人鬼神不得食錢財
未幾集故奴藏未出可也十日多辨食亦請之老父曰大設酒食請
師婆以金懸於門而作觀之來觀之來鏡鏡者皆云
此家三日月見鏡於門而作觀之來觀之來鏡鏡者皆云

敦煌写本『啓顔録』の中の「鏡男」

とところが鏡がしつかりと懸かって
いなかっただために、落ちて二つに割
れてしまった。

巫女が手に取ってみると、どちら
にもその姿が映っている。そこで喜
んでいった。

「神明が福を与えてくださり、一人
の下人が二人の下女になった」

そして、④こう歌った。

「一家揃って柏手打てば、神明は供
物を享受する。下人を買えば下女も
従い、一つが割れて二つとなった」

天正狂言本と『啓顔録』の類似点

①登場人物

〔現行本〕 男、妻、鏡売(和泉流)

〔天正本〕 男、妻、父、鏡売

〔啓顔録〕 男、父、鏡売、母、妹、

村人たち、巫女

②男が都へ行った目的

〔現行本〕 訴訟のため

〔天正本〕 下人を買うため

〔啓顔録〕 下人を買うため

③男が鏡を買った理由

〔現行本〕 妻への土産

〔天正本〕 鏡を知らずに騙されて

〔啓顔録〕 鏡を知らずに騙されて

④終曲の演出

〔現行本〕 怒った妻が男を追い込む

〔天正本〕 笛の音でめでたく留める

(シヤギリ留め)

〔啓顔録〕 謡でめでたく留める

(謡留め)

『雜譬喻經』と狂言「鏡男」

これまで狂言「鏡男」のルーツは古代インドの仏教説話にあると考えられてきた。後漢のころ漢訳された『雜譬喻經』という經典にある次の説話である。

ある夫婦が葡萄酒の甕に映った自身の姿を見て、それぞれ相手が甕の中に愛人を匿っているとして喧嘩を始める。そこに一人の出家者が現れ、甕を叩き割って二人に悟りを開かせる。

日本でも平康頼の『宝物集』などに引かれ、広く知られていた。

侍ルメレ天竺ノ美人天女ニ比レハ雪山ノ猿ノ如シ況
ヤ日本國ノ末代ノ女ハ美ト云トモ定テ汗穢不淨
ニ何事カハ侍ルベキ速ニ難陀ガ思ヲナシテ娼欲
ヲ離シテ無上菩提ノ心ヲ起ベキ也
四ハ不飲酒ト云ハ酒ヲ飲ヌヲ申シタル也天竺ニ
人ノ長者アリキ七寶ニトモシカラス萬物豊ニシテ
一ツノ庫倉ノ内ニ酒ヲ作シテ壺大ニシテ酒ノ澄
ル事泉ノ如シ長者妻倉ニ入テ酒瓶ヲ見ニ若
キ女ノ容好アリ長者ノ妻急キ返テ長者ヲ

恨テ云ク汝ヲ頼テ婿老同穴ノ契深シ年来又
遺恨ナクシテ過シツルニ如何ニ瓶ノ中ニ容好女ヲ
隠シ置テ我ニ打トケタル姿ヲハ見セツルゾ恨
欠レハ長者急倉ニ入テ酒瓶ヲ見ニオトナシヤカ
ナル男ノ清氣ナルアリ長者ノ思ヒケルヤウハ我
妻ノ倉ノ内ニヒツカニ隠シ置テ我ヲスカシヤリテ
殺サントスルコトナリケリト心得テ年来ノ妻ヲ
恨テ既ニ離別シナントシケルヲ一人ノ羅漢是事
ヲ心得テ酒瓶ヲ取出テ夫妻ノ前ニシテ是ヲ

ウチワルニ其時内ヲ見ニ男ナシ妻モナシ酒ハ是
イマダ飲ガルニ凶ヲ致ス物也況ヤ吞テ醉ニ於テ
ヲヤ昔迦葉佛ノ時一人ノ優婆塞アリキ酒ニ酔テ
本心ヲ失ヘル故ニ人ノ妻ヲ犯ツ又鶏ヲ盗テ殺ツ
其時至腹立テカコツ時不殺トアラガヒ又此故ニ
則チ飲酒致生倫盜妄語等ノ五戒ヲ破リ畢又細

『雜譬喻經』と狂言「鏡男」

この説話は現行の狂言「鏡男」と筋立てが近いが、逆に天正狂言本が伝える中世の狂言からは遠くなってしまう。

敦煌写本『啓顔録』の話をその起点に置くことにより、この狂言の歴史的な変遷が矛盾なく説明できるようになったのである。



『啓顔録』の伝来

『啓顔録』の伝来

では、この『啓顔録』は日本にも
伝えられていたのだろうか。

九世紀末（平安時代前期）、藤原
佐世は勅命を受け、当時日本に現存
していた漢籍の総目録を編纂した。

『日本国見在書目録』である。

この目録には「啓顔録十」という
記録が見られ、当時、日本にも『啓
顔録』（「十」は十巻本を表す）が伝

丹わつていたことがわかっている。

文一 度信任大常事十八 遍越甲離一 珠英学

士五 河岳英靈一 荆楊復秀二 吏部一 遠西

檀會一 類二 詞林敬言四 要十八上下 新二

詞苑麗則六度類 書音 聖母神皇系格後四 聖

十 玉相一 文房麗藻十 詩苑一道衛 開成四

文箱三 河南十 鳳巖十 弘明十四 唐二

傷松一 燦章十五 **啓顔録十** 古今詩人秀句二元叢

辭後三 大周朝英十 貞觀一 玉臺新詠十徐琰

連珠七琰 金華藏州四 玉壽四 子三 馳歸信門一

『日本国見在書目録』



『啓顔録』の伝来

しかし、『啓顔録』はその後、中国でも日本でも失われてしまったため、そこに「附子」や「鏡男」のルーツと思われる話が載っていたことは、シルクロードでこの古写本が発見されるまでわからなかった。

民間交流が果たした役割

もつとも『日本国見在書目録』が
編纂されたのは、狂言が誕生する五
百年以上も前のことである。狂言が
誕生した鎌倉時代から室町時代の初
めは「渡来僧の世紀」とも呼ばれる
ように、禅僧を中心とした日中の民
間交流がもつとも盛んな時代でも
あった。

あるいは日中間を往来した僧侶や
商人たちが、演劇の交流に何らかの
役割を果たしたのかもしれない。

- 文一 度信任大常寺十六 遍越甲離一 珠英学
- 士五 河岳英靈一 荆楊樓秀二 吏部一 遠西
- 檀會一 類二 詞林敬誓句 要十八上下 新一
- 詞苑賢則 文度頭 真樞 齋言 聖母神皇系格 後句 聖
- と十 玉相一 文房賢藻 詩苑一道衛 開成句
- 文箱三 河南十 鳳巖十 弘明十四 唐句
- 傷松一 豫章十五 啓願録 古今詩人秀句二元
- 辭後三 大周朝英十 貞觀一 玉臺新詠十徐
- 連珠七珠 金華藏州句 王壽四 子三 融歸信明一

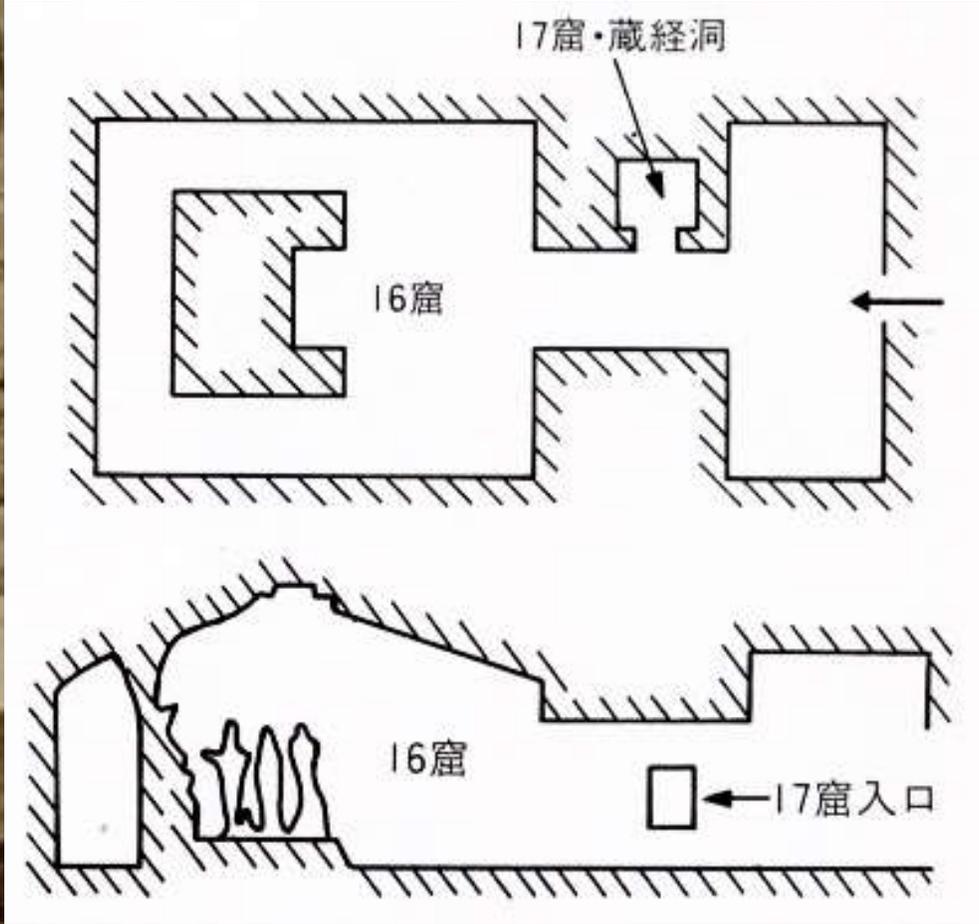
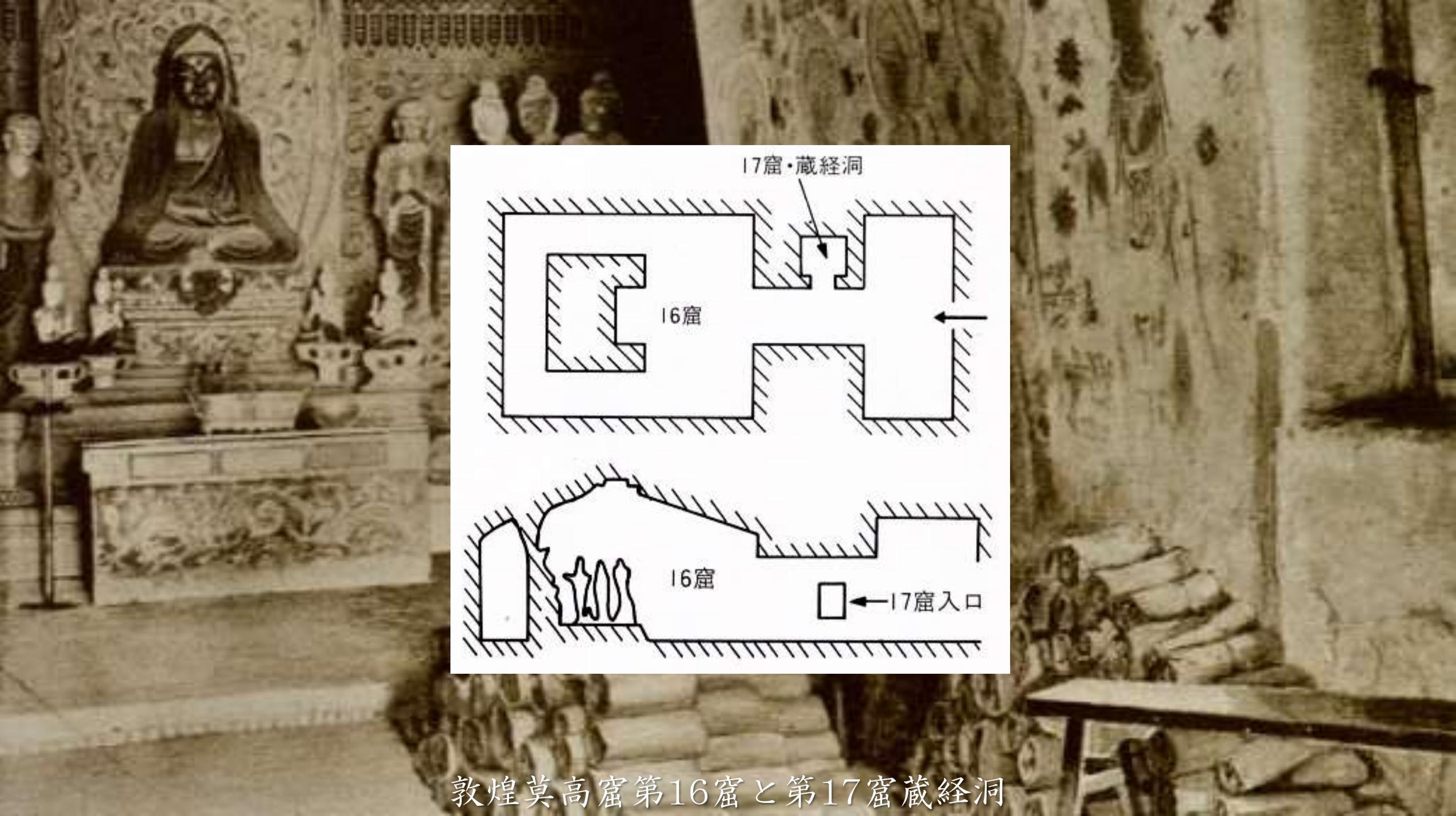
A dark, sepia-toned photograph of a cave interior. On the left, a large seated Buddha figure is carved into the rock wall. To its right, a group of standing figures is also carved. In the foreground, several large, rolled-up scrolls are stacked on the floor. The overall atmosphere is historical and somber.

敦煌文書はなぜ封蔵されたのか

敦煌文書が発見された莫高窟(1900年)

清朝





敦煌莫高窟第16窟と第17窟藏經洞

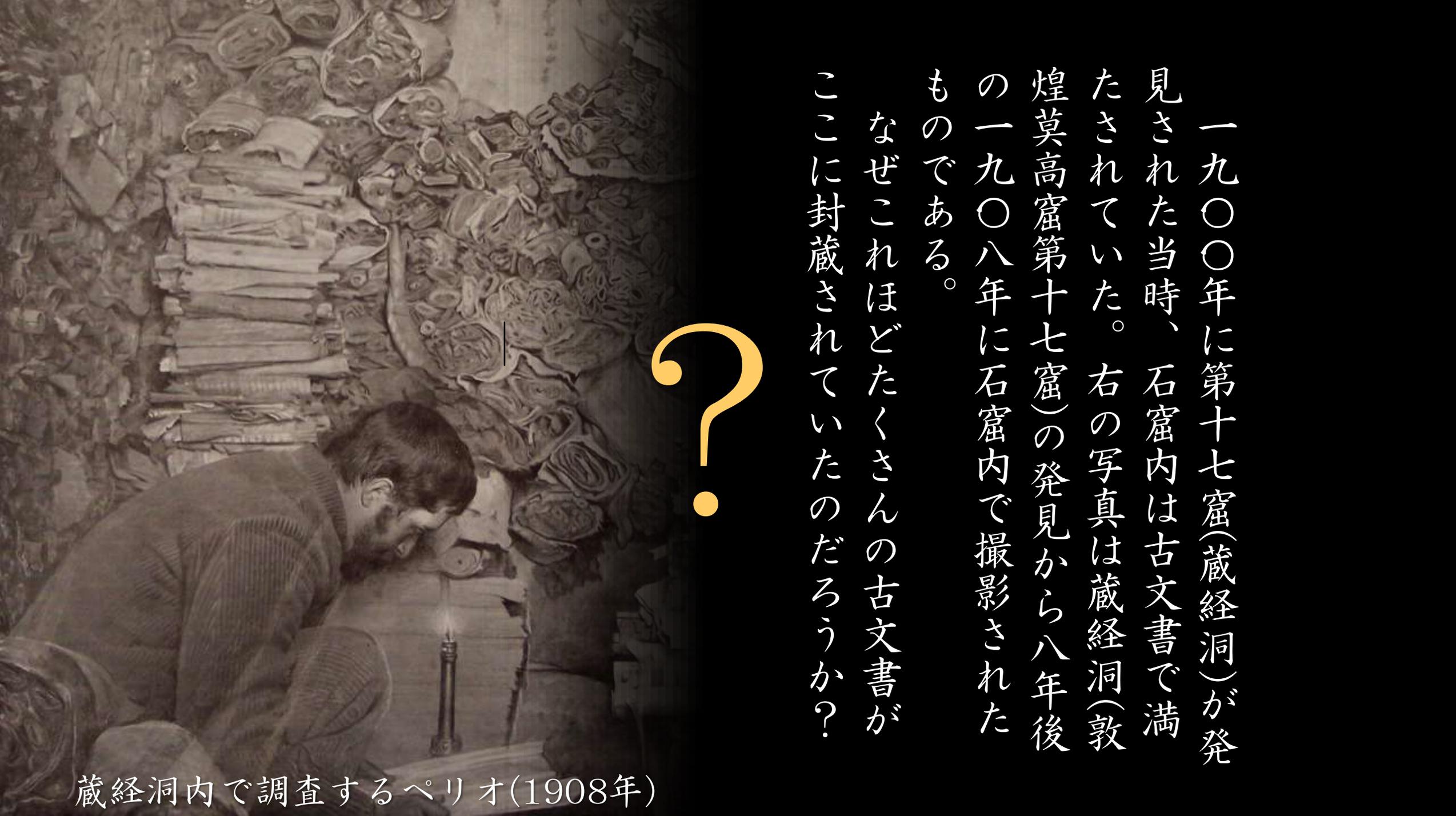


敦煌莫高窟第16窟と第17窟蔵経洞

高僧の御影堂だった第十七窟

石窟内に残された碑文から、ここは元来、洪べんという高僧の像を祀る御影堂だったことがわかった。





一九〇〇年に第十七窟(蔵経洞)が発見された当時、石窟内は古文書で満たされていた。右の写真は蔵経洞(敦煌莫高窟第十七窟)の発見から八年後の一九〇八年に石窟内で撮影されたものである。

なぜこれほどたくさんさんの古文書がここに封蔵されていたのだろうか？

蔵経洞内で調査するペリオ(1908年)

A sepia-toned portrait of Paul Pelliot, a man with a mustache, wearing a dark suit and a white shirt with a tie. He is looking slightly to the left of the camera.

ペリオの「西夏侵攻」説

一九〇八年に第十七窟(蔵経洞)を調査したフランスのペリオは、この石窟が封蔵された年代と理由について、次のように報告している。

①古文書に記された年号で最も新しいのは十世紀末である。

②古文書の中に西夏文字で書かれたものはない。

これらの理由から、この石窟は一〇三五年に西夏が敦煌に侵攻する前に、貴重な文書を守るために封蔵されたと推定される。

Paul Pelliot (1878-1945)

井上靖の小説『敦煌』

ペリオが唱えた「西夏侵攻」説をヒントに、敦煌文書の謎を描いたのが、井上靖の小説『敦煌』である。

小説『敦煌』では、西夏との戦いの中、貴重な古文書を守るため、蔵経洞（敦煌莫高窟第十七窟）内に封蔵するようすが描かれている。

同小説は、一九八八年に映画化され、翌年の日本アカデミー賞で最優秀作品賞と監督賞を受賞した。

小説『敦煌』のあらすじ

ときは十一世紀初めの北宋時代。
科挙に失敗した趙行徳は、西夏の
文字に興味を持ち、西域に向かう。
途中、西夏の軍に捕えられるが、漢
民族の部隊長・朱王礼に救われ、西
夏の都で西夏文字を学ぶ。

趙行徳(佐藤浩市)





映画「敦煌」 (佐藤純弥監督、1988年)

小説『敦煌』のあらすじ

数年後、西夏軍の漢民族部隊の指揮官となっていた朱王礼は、愛する女性を奪われた恨みから、西夏の皇帝・李元昊の暗殺を企てる。しかし、暗殺は失敗し、朱王礼が居城とした敦煌は、西夏軍の猛攻を浴びる。

朱王礼(西田敏行)





映画「敦煌」 (佐藤純弥監督、1988年)

小説『敦煌』のあらすじ

西夏の都から朱王礼のもとに戻った趙行徳は、西夏軍の侵攻から仏教經典などの貴重な文物を守るため、敦煌郊外の石窟に古文書を運び、封蔵する。

蔵經洞(敦煌莫高窟第17窟)



映画「敦煌」 (佐藤純弥監督、1988年)



Paul Pelliot (1878-1945)

ペリオの「西夏侵攻」説の問題点

ペリオが唱えた「西夏侵攻」説にはいくつかの問題点があった。

- ① 敦煌文書の大部分は仏教經典である。仏教国である西夏から、なぜ仏教經典を守る必要があったのか
- ② 突然の侵攻であったのに、なぜ壁一面に壁画を描く時間があったのか



敦煌莫高窟第16窟と第17窟藏経洞

一方、イギリスの探検家スタインは、一九二一年に出版した調査報告書 Serindia の中で、ペリオとは異なる説を唱えている。その説とは？

① イスラム王国カラハン朝脅威説

② 仏教末法説

③ 聖なるゴミ箱説



Sir Aurel Stein (1862-1943)

Serindia(セリンディア)

スタインは一九二一年、第二次中央アジア探検(一九〇六〜八年)に関する報告書 *Serindia* を出版している。本文三冊と写真集一冊、地図集一冊からなるこの報告書には、敦煌文書が発見された直後の莫高窟のようすが写真とともに詳細に紹介されている。

【参考】 国立情報学研究所

『東洋文庫所蔵』貴重書デジタルアーカイブ

SERINDIA

SIR AUREL STEIN



スタインの「聖なるゴミ箱」説

「……大量の文書の中からは、一〇三四年から三七年の間に敦煌を征服し、その後二百年近くこの地を支配した西夏(タングート)王朝の創始者が制定した、あの奇妙な文字(西夏文字―引用者)はまったく見つかっていない。」

Aurel Stein: Serindia vol.II, 八二〇頁、一九二一年

Sir Aurel Stein (1862-1943)

西夏文字

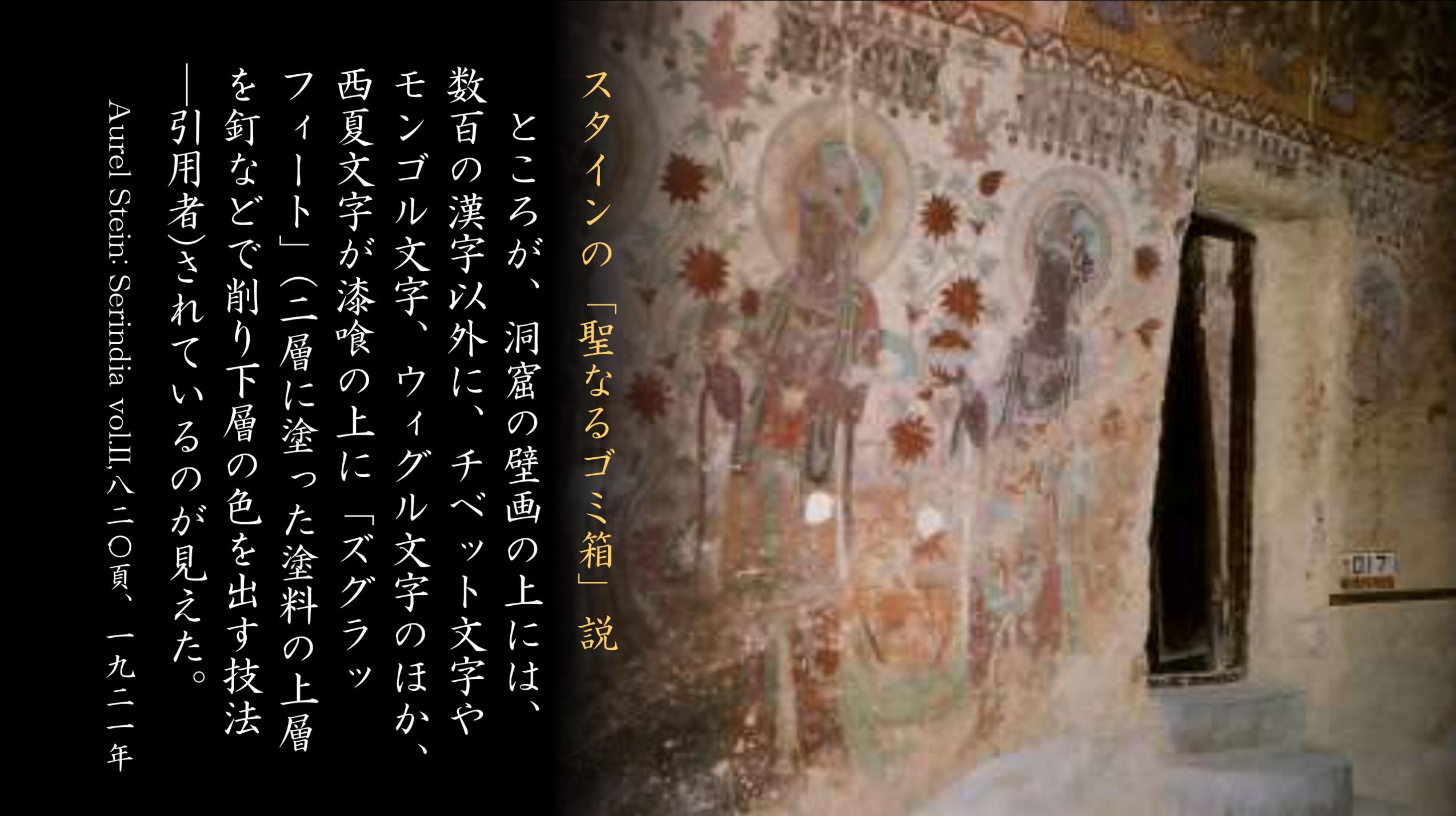
西夏王朝(一〇三二〜一二二七)を建国した、タングート族の首長・李元昊が、一〇三六年に制定した文字。約六千種の文字があり、学校教育や公文書の作成、仏教經典の翻訳などに使われた。

謎の文字とされていたが、京都大学の西田龍雄氏らが解読に成功した。



西夏文字で書かれた『法華經』25章(木版)

西夏文字で書かれた『法華經』25章(木版)



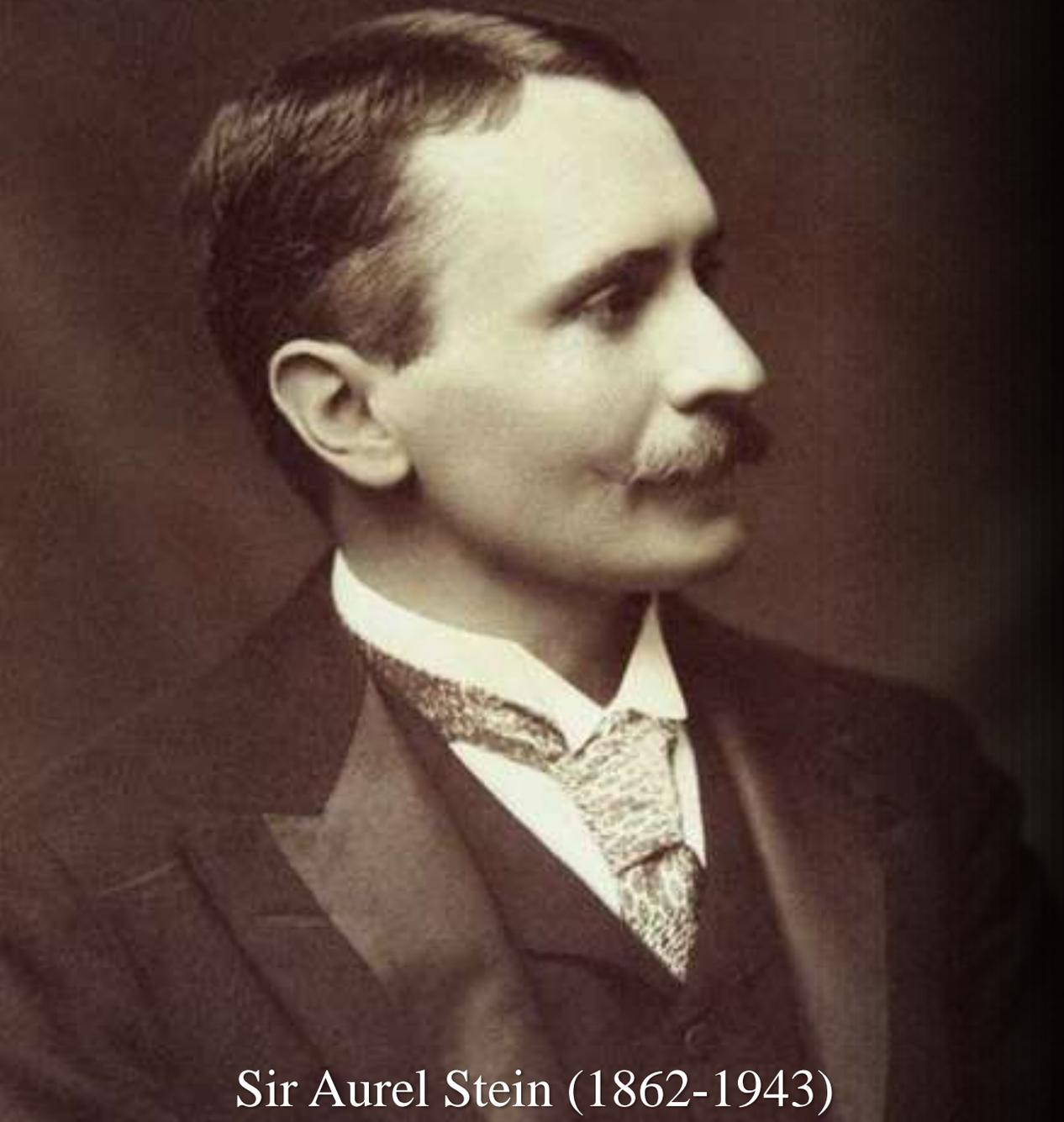
スタインの「聖なるゴミ箱」説

ところが、洞窟の壁画の上には、数百の漢字以外に、チベット文字やモンゴル文字、ウイグル文字のほか、西夏文字が漆喰の上に「ズグラツフイート」（二層に塗った塗料の上層を釘などで削り下層の色を出す技法―引用者）されているのが見えた。

スタインの「聖なるゴミ箱」説

となると、自然考えられることは、この部屋は、たとえばタングート族などの破壊的な侵攻が原因で封印され、その後、保存したこと自体がすっかり忘れ去られてしまったのではないかということである。

Aurel Stein: Serindia vol.II, 八二〇頁、一九二二年



Sir Aurel Stein (1862-1943)

スタインの「聖なるゴミ箱」説

ところが、この小部屋ではまた、
寺廟や僧院で使用され、不要となっ
た聖なる不要品の貯蔵庫として使わ
れていたことを示す証拠も見つかっ
ている。

Aurel Stein: Serindia vol.II, 八二〇頁、一九二二年

Sir Aurel Stein (1862-1943)

スタインの「聖なるゴミ箱」説

なかでも特筆すべきなのは、經典の端切れである漢字を記した紙切れを、丁寧に入れて縫い上げた小さな布袋である。

中国の人々は今でも文字の書かれた紙が床や道に落ちていると、拾って燃やす習慣があるが、これらは明らかにそれと同じ迷信から行われたものである。(完)

Aurel Stein: Serindia vol.II, 八二〇頁、一九二二年

Sir Aurel Stein (1862-1943)

「敬惜字紙」の習慣

經典を重んじ、因果応報を唱える
仏教思想の影響を受けた中国では、
文字が書かれた紙を他のごみと分別
収集し、惜字塔などと呼ばれる専用
の炉で焼く、「敬惜字紙」の習慣が
古くから行われていた。

写真は台湾に現存する清代の惜字
塔「龍潭聖蹟亭」。

台湾の龍潭聖蹟亭(清光緒元年(1875年))

仏教經典の崇り

〔解説〕

宋の洪邁は北宋末から南宋初の約百年間の民間雑事六千項目を集めた『夷堅志』を編纂した。同書の夷堅支甲巻第六には、仏教經典の崇りにまつわる「兜率寺經」（とそつじきよう）という一篇が収められている。

之凡數日好事者竊迹其所止乃入村崇寺之僧堂堂空無人獨三女者共處旁人夜夜聞搗藥聲旦則復出初未嘗見其寢食處也他日寺僧密窺之乃皆一足失聲歎咤婦人如已聞之

夷堅甲志卷第二十

光緒五年歲在屠維單閼吳興陸氏十萬卷樓重雕

陸心源校

兜率寺經

分寧縣兜率寺有張天覺所書圓覺經兵火後為近居民黃生所得寺僧求之不許黃愚人也不知為可貴視其紙堅淨遂毀以為卧榻單久之得癩疾痛苦穢腐數年乃死

（宋）洪邁『夷堅志』夷堅支甲巻第六

仏教經典の祟り

分寧県の兜率寺に張天覺が著した『円覺經』があった。兵火の後、近くに住む黄という人がそれを手に入れた。寺の僧がこれを返すよう頼んだが、同意しなかった。

(宋) 洪邁『夷堅志』夷堅支甲卷第六・兜率寺經

分寧県 (現江西省修水県)

兜率寺經

分寧縣兜率寺有張天覺所書圓覺經兵火後為近居民黃生所得寺僧求之不許黃愚人也不知為可貴視其紙堅淨遂毀以為卧榻單久之得癩疾痛苦穢腐數年乃死

(宋) 洪邁『夷堅志』夷堅支甲卷第六

仏教經典の祟り

黄は愚かな人で、それが尊いものであるとも知らず、紙が丈夫なのを見ると、ばらばらにして寝台の敷物にした。しばらくすると、らい病にかかり、体を腐らせて苦しんだあげく、数年後に死んだ。

(宋) 洪邁『夷堅志』夷堅支甲卷第六・兜率寺經

分寧県 (現江西省修水県)

兜率寺經

分寧縣兜率寺有張天覺所書圓覺經兵火後為近居民黃生所得寺僧求之不許黃愚人也不知為可貴視其紙堅淨遂毀以為卧榻單久之得癩疾痛苦穢腐數年乃死

(宋) 洪邁『夷堅志』夷堅支甲卷第六

儒教經典の恩返し

〔解説〕

明の郎瑛（一四八七〜？）の随筆集『七修類稿』巻四十九には、儒教經典の恩返しにまつわる「王沂公生」という一文が収められている。

仁和郎仁寶著

七修類稿

蘇州錦雲閣梓

大之奇變熟乎朝廷之典故
聰明鋼矣春秋記二百四十二年之事聖人
代而據事直書此後世紀國事者之
理而若萬物之變不極乎天地之廣大則耳目益而

王沂公主

文昌化書後載梓童坤降筆勸敬字紙文又曰宋王沂公之父見字紙遺墜必撿拾以香湯洗燒之一夕夢宣聖拍其背曰汝何以重吾字紙之勤也恨汝老矣無可成就他日當令曾參來汝家與生顯大門戶未幾果生一男遂命名曾後果狀元及第誠若是則吾夫子亦有輪迴果報之事乎老杜所謂孔子釋氏親抱送者非欺我也可發一笑

儒教經典の恩返し

宋の王沂公①の父は、文字が書かれた紙が落ちて見ると、必ず拾って、香りをつけたお湯で洗い、燃やしていた。

(明) 郎瑛『七修類稿』卷四十九・王沂公生

【解説】

①王曾(九七八〜一〇三八)、北宋時代の官僚。貧困の中から身を起こし、咸平年間、解試、省試、殿試の三試験でいずれも首席で合格し、科挙史に残る快挙をなした。

七修類稿

蘇州錦雲閣梓

大之奇變幾乎朝廷之典故
聰明鋼矣春秋記二百四十二年之事聖人
理而善萬物之變不極乎天地之廣大則耳目益而
代而操事直書此後世紀國事者之

王沂公主

文昌化書後載梓童坤降筆勸敬字紙文又曰宋王沂公之父見字紙遺墜必撿拾以香湯洗燒之一夕夢宣聖拍其背曰汝何以重吾字紙之勤也恨汝老矣無可成就他日當令曾參來汝家與生顯大門戶未幾果生一男遂命名曾後果狀元及第誠若是則吾夫子亦有輪迴果報之事乎老杜所謂孔子釋氏親抱送者非欺我也可發一笑

儒教經典の恩返し

ある夜のこと、夢に孔子が現れ、彼の背を叩いてこう言った。

「お前は（儒教の）文字が書かれた紙をなぜそんなに大切にしてくるのか。お前は高齢で立身出世が望めぬのは残念だが、後日、（弟子の）曾参をお前に家に転生させ、一族を繁栄させてやろう。」

仁和郎 仁寶著

（明）郎瑛『七修類稿』卷四十九・王沂公生

七修類稿

蘇州錦雲閣梓

大之奇變幾乎朝廷之典故
聰明銅矣春秋記二百四十二年之事聖人
理而善萬物之變不極乎天地之廣大則耳目益而
代而據事直書此後世紀國事者之

王沂公主

文昌化書後載梓童坤降筆勸敬字紙文又曰宋王沂公之父見字紙遺墜必撿拾以香湯洗燒之一夕夢宣聖拍其背曰汝何以重吾字紙之勤也恨汝老矣無可成就他日當令曾參來汝家與生顯大門戶未幾果生一男遂命名曾後果狀元及第誠若是則吾夫子亦有輪迴果報之事乎老杜所謂孔子釋氏親抱送者非欺我也可發一笑

（明）郎瑛『七修類稿』卷四十九

儒教經典の恩返し

しばらくすると、夢のお告げのとおり男の子が生まれたので、(曾参にちなんで)曾と名づけた。すると、夢のお告げのとおり科挙に一番で合格した。

(明) 郎瑛『七修類稿』卷四十九・王沂公生

仁和郎仁寶著

七修類稿

蘇州錦雲閣梓

七修類稿序
夫文以察於地理是故通幽明之
理而審萬物之變不極乎天地之廣大則耳目益而
聰明鋼矣春秋記二百四十二年之事聖人
代而據事直書此後世紀國事者之
大之奇變幾乎朝廷之典故

王沂公主

文昌化書後載梓童坤降筆勸敬字紙文又曰宋王沂公
之父見字紙遺墜必撿拾以香湯洗燒之一夕夢宣聖拍
其背曰汝何以重吾字紙之勤也恨汝老矣無可成就他
日當令曾參來汝家與生顯大門戶未幾果生一男遂命
名曾後果狀元及第誠若是則吾夫子亦有輪迴果報之
事乎老杜所謂孔子釋氏親抱送者非欺我也可發一笑

(明) 郎瑛『七修類稿』卷四十九

儒教經典の恩返し

もしこれが本当なら、われらが孔子様も(仏教が説く)因果応報をやったことになり、杜甫の詩にいう「孔子と釋氏、親しく抱き送る①」も嘘ではないようだ。なんとも滑稽な話だ。

(明) 郎瑛『七修類稿』卷四十九・王沂公生

【解説】

①(唐)杜甫「徐卿二子歌」(全唐詩卷二一九所収)

君不見徐卿二子生絕奇、感應吉夢相追隨。

孔子釋氏親抱送、並是天上麒麟兒。

(完)

七修類稿

蘇州錦雲閣梓

大之奇變幾乎朝廷之典故
聰明銅矣春秋記二百四十二年之事聖人
代而據事直書此後世紀國事者之
理而若萬物之變不極乎天地之廣大則耳目益而

王沂公主

文昌化書後載梓童坤降筆勸敬字紙文又曰宋王沂公之父見字紙遺墜必撿拾以香湯洗燒之一夕夢宣聖拍其背曰汝何以重吾字紙之勤也恨汝老矣無可成就他日當令曾參來汝家與生顯大門戶未幾果生一男遂命名曾後果狀元及第誠若是則吾夫子亦有輪迴果報之事乎老杜所謂孔子釋氏親抱送者非欺我也可發一笑

(明) 郎瑛『七修類稿』卷四十九

A photograph of a man with glasses, wearing a dark jacket over a light blue shirt, sitting in a library. He is looking down at a large, unrolled scroll of paper he is holding. The background is filled with wooden bookshelves packed with books. The lighting is warm and focused on the man and his scroll.

スタイン説を補強した中国の研究者

敦煌文書の価値を重視する中国では、スタインの説を支持する研究者は少ない。その中で、原資料に対する綿密な調査と網羅的なデータ収集によって、スタインの説を補強しているのが中国社会科学院研究員の方広錫氏（一九四八）である。



方広鋁の「廃棄説」

①敦煌文書から発見された仏教経典はわずかに四百種弱に過ぎず、当時の標準的な大蔵経（唐の智昇『開元釈教録』「現蔵入蔵目録」所収一〇七六種）の半数にも満たない。

『方広鋁敦煌遺書散論』

（上海古籍出版社、二〇一〇年）

方広鋁(1948-)

方広鋁の「廃棄説」

②敦煌文書はほとんどが使い古しの残巻であり、天竿(卷子本の巻首を保護するためにつけられた細い竹や木)と尾軸(卷子本の軸、左図参照)が揃ったものは、中国国家図書館蔵の一六五七八部の中ではわずか八部、大英図書館蔵の約一四〇〇〇部の中でも三〇部に過ぎない。

『方広鋁敦煌遺書散論』

(上海古籍出版社、二〇一〇年)





方広鋁の「廃棄説」

③敦煌文書は同じ經典の重複が多く、主要な八種の仏教經典の合計が、中国国家図書館所蔵のものでは全体の六六・三%、世界各地に散在する敦煌文書約六五〇〇〇部の中でも四四・二%を占めている。

『方広鋁敦煌遺書散論』

(上海古籍出版社、二〇一〇年)

方広鋁(1948-)

方広鋁の「廃棄説」

さらに氏は、中国国家図書館蔵の敦煌文書の中から「この紙は故経処に安置されたし」と書かれた廃紙（『大般若波羅蜜多經』北敦〇七七一一号）を発見している。氏によれば、この「故経処」とは敦煌の寺院の中にあつた廃紙の保管場所を指すという。

『方広鋁敦煌遺書散論』

（上海古籍出版社、二〇一〇年）



方広鋁(1948-)

あなたはフランスのペリオが唱えた貴重文書の保管庫説と、イギリスのスタインが唱えた聖なるゴミ箱説のどちらが正しいと思いますか？

①ペリオの貴重文書の保管庫説

②スタインの聖なるゴミ箱説



まとめ

奈良時代、中国から伝えられた散楽は、平安時代になると、滑稽な寸劇である「猿楽」を誕生させた。猿楽は中世になると、謡と舞と囃子によって物語を演じる能へと発展し、滑稽劇としての「猿楽」の伝統は狂言へと継承されていった。

一方、宋代から元代にかけて滑稽な寸劇から本格的な歌舞劇を誕生させた中国でも、演劇は一般に「散楽」と呼ばれていた。

狂言とアジアとの関わりについては、十九世紀の末、敦煌莫高窟から発見された敦煌写本『啓顔録』により、狂言のいくつかが中国から伝わった笑話に題材を得ていることが明らかになった。

敦煌文書が封蔵された理由については、英国のスタインが唱えた「廃棄説」とフランスのペリオが唱えた「退避説」の二説があるが、近年では「廃棄説」が有力視されている。